

吉祥院百年のあゆみ

吉祥院学区の歴史と史跡

「天満宮」宮司 石原定和

記念誌発行に際し、乞われるまゝに拙文を寄せる事になりましたが、種々不完全の点お許し下さい。

(一) 「吉祥院」の地名の起源

桓武天皇が延暦十三年(七九四)都を平城京より長岡を経て、平安京(京都)に遷された時、菅公の曾祖父古人(学者)、祖父清公(政治家)等供奉し来り、帝より大内裏に近い南西に広大な地を賜り、大和の「菅原の庄」より六ツ田家(姓に田のつく六家)始め一族郎党と共に移り住むことになった。当時は未開発で桂川の下流域に在るため水害の機会も多く、地名も「石原の庄」「石原郷」と呼び、上、中、下に分けられ、中石原を「白井の庄」とも云った。菅原家は、この概ね中央部に当る所に本邸を構え、一族それぞれ小高い所に分散居住し、東條、西條、南條、北條の四地域に分け、先住

人と共に、主に農業を営んだ。吉祥院に「石原」及び「田」のつく姓の割合に多いのはこの故で、血縁に無関係の場合もある。

延暦二十三年(八〇四)七月、

清公卿が遣唐使として渡唐の際海難に遭遇し、同船の伝教大師と共に「吉祥天女」に平安を祈られ、無事帰朝後加護を謝し、吉祥天女の尊像(現存)を自ら刻み、大師と議り、大同三年(八〇八)本邸内に一堂を建立安置して、「吉祥院」と名づけられて後、菅原家を「吉祥院様」と通称するようになり、地名もいつしか吉祥院郷等と呼ぶようになった。これが村名の起源で、尚古記録に、石原郷、石原邑、菅原郷、菅原院邑、吉祥院邑等の名でも出て来る。

(二) 当地と菅原道真公

是善卿(父)は、邸内に文書院聖堂(学問所)を設け、朝廷仕出の傍ら子弟を教育された。(学校

の草分けか)菅公は承和十二年(八三五)六月二十五日に誕生、此の地で学問に励まれ、十八才で文章生(上級官吏登用試験相当)に合格後は、御所仕えの都合で上屋敷(後の紅梅殿)に移住されたが、三十六才の時父君が死去せられたので以後は当地より通われた。

当時御愛用の「牛の鞍」は、神社の宝物として遺り、現在東京国立博物館に委託鄭重に保管中で、同類のものは我国で二鞍有るのみと聞く。寛平六年(八九四)九月二十五日に、五十歳の賀を当地で行われたことは有名で、菅公在世中の特筆すべき盛大行事であった。

醍醐天皇延喜元年正月二十五日、太宰権師に左遷が決り、桂川西岸古川(今の久我)より乗船西下せられたが、其の節当地に残された夫人に「君が住む宿の梢の行々も、かくるゝまでにかへり見しはや」と詠まれたので、後に別名「みかえりの森」とも云った。残念ながら千年に余る老樹や其他大木も昭和九年の室戸台風で殆んど

倒れ、今は昔の面影が全く無い。

延喜三年(九〇三)二月二十五日に五十八歳で薨去、太宰府安楽寺に葬られたが、其後京は荒れ、災厄多いため、日藏上人笹の岩屋にこもり、天神より「若し人我形を作り、我名を唱えて尊重せば其人を護らん」との神託を受け、朱雀天皇に奏上し、菅公歿後三十一年目の承平四年(九三四)に、本邸内に社殿を建立、御幼少像を刻み、天満宮として勅祀されたのが神社の創りである。後、菅家領の大部分の神領とし、秀吉と争い奪われるまで続いた。当時迄菅原家を長に六ツ田家(安田、神田、福田、奥田、岩田、寺田)及藪田、石原、恩田家等が神明に奉仕していた。現在も「天満宮」が本名で「吉祥院天満宮」は通称である。尚二十五日は菅公と縁り深い日であることがわかる。

(三) 史跡、町名等について

過去の歴史に繋る史跡、町名、地名等数多く有りますが、紙面の都合で省略し一部記述に止めます。

◆「天神川」上流を紙屋川、吉祥

院領に入って天神川、昔は水清く

◆「政所町」菅公夫人「北政所」

院領に入って天神川、昔は水清く豊富で、魚貝類数多住み、漁師舟も浮んでいた。近年になって西高瀬川と変名されたのは歴史無視で惜しい。

◆「御幸橋」鳥羽帝が行幸の御又勅使参向の際渡られた正面橋跡。

◆「六田の杜」或は「音き、の杜」菅公に秋の虫の音を聞いて貰うために六田家等が虫を集め来り放った地の遺跡で、神社東方約百米の所。

◆「硯の井」跡、神社より東約三百米の所に在る。(説明は過去に記述済)

◆「鑑の井」跡、境内に在り、菅公参朝の節、姿を写された井戸、江戸時代の著名書家「葛鳥石」銘文の石碑が建っている。(宝暦四年)

◆「古人郷墓所」神社より約六百米南西に在り、菅原墓とも云い使用中。

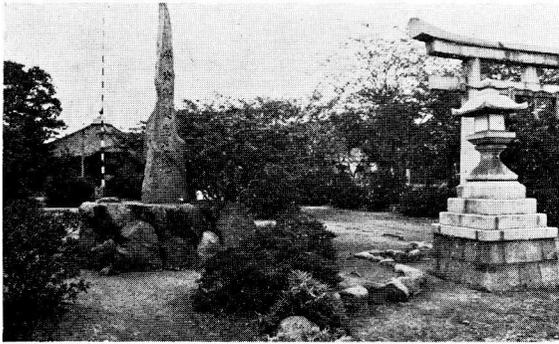
◆「清公郷墓所」跡、神社より南東方約五百米の所に小面積で残る。

◆「是善郷墓碑」神社より約二百米南の香泉寺庭内に遺る。

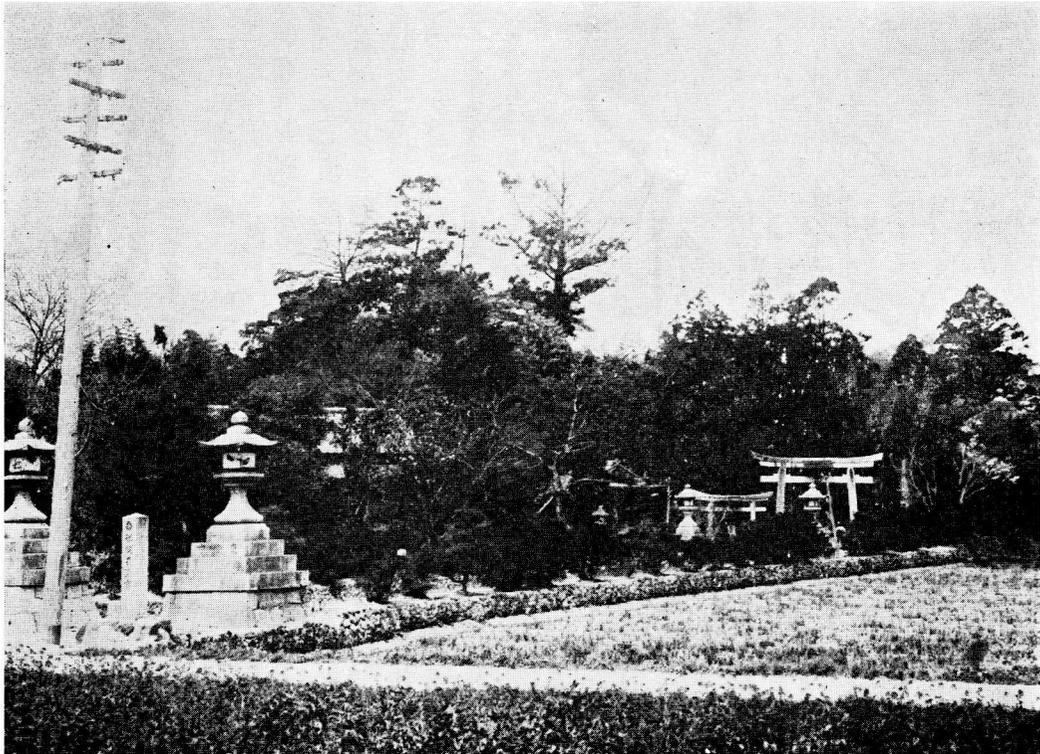
◆「政所町」菅公夫人「北政所」が居住せられた土地縁による。

◆「御池町」邸内北寄に大池あり、後に御池跡と呼んだ地名から出た。

以上で一応終了ですが、尚江戸時代から明治年間迄、現吉祥院学区内での小村分立、合併統合等の歴史、町名地名の発祥等研究に値するもの数多く有ることを追記し諸賢の調査を期待します。



境内東入口附近



昭和2年頃の天満宮東入口附近

吉祥院百年その沿革

人に父母あり家に祖先があつてその起原をなすように、街町また起原のない事があろうか。こゝに吉祥院百年に際して、往昔より今日迄、続いて来た吉祥院を、今振かえて如何なる発展の事柄をたどつて来たか、茲に知り得た小さな範圍に於いて、その沿革を記述して御高覧にそえる事とした。然しこれを史実に求めるも、その記録する所甚だ少なく、たま／＼これを得るも確實なもの又稀である。更に伝説に求めるも、区々枝葉に流れ、其の根拠薄弱にして史料の参考となるもの少ない。しかし求めて得ざるなくたゞねて知れざるの如く、ようやく一部の稿を草するに至つた。私達の街吉祥院、その百年をたゞねようとすれば、村を郡をさらに山城のさらにさかのぼつて遠く平安の昔をたゞねなければならぬ。

新居を京都に桓武天皇 東京を新居に明治天皇

最初に地名起源の項に記したように平安京を造られた桓武天皇は何といつてもトップバッターであるが、つゞいて平清盛、応仁、文明の乱で京都を荒廢させてしまつた三羽鳥が足利義政、細川勝元、山名宗全で前後十一年間にわたる市街戦で京都を全滅させてしまつたが、今に残るは西陣という織物の産地の名前と銀閣寺位のものであろうか。その次登場するのが織田信長、豊臣秀吉、江戸幕府の祖徳川家康、最後の將軍慶喜公で、慶喜公とからまりながら京都にさよならと東京へ去られたのが明治天皇である。

さらに南朝北朝時代の後醍醐天皇や、悪人にされたり忠臣になつたり足利尊氏や、あつというまに平家を打ち破つて京都を手に入

れた木曾義仲（源義仲）や、さらに源頼朝、義経の兄弟も京都にとつては無視する事の出来ない人物が調べる程にいくらでも現われてくるのである。

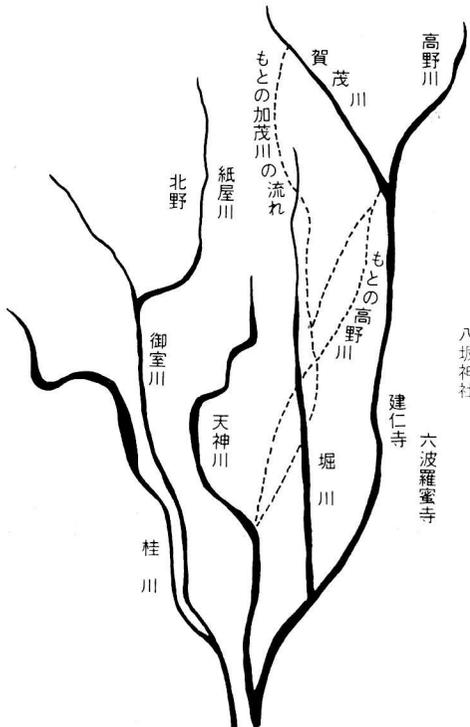
桓武天皇平安遷都以前

平安京の出来る迄の京都はどんなになつていたのだろう。好奇心は止めどもなく、平安京のさらに昔にさかのぼつてまでも知りたくなつてくる。日本の歴史（中央公論）や林屋辰三郎先生の「京都」（岩波新書）を見ると、賀茂川と

高野川が合流する地点はどうも吉祥院辺りのようである。何万年か前には京都付近は断崖によつて陥没した湖底であつたという。

平安京の大土木工事

平安京は御承知の如く延暦十三年に長岡京から都をうつされたのだが、その時の都市計画では南北に通つた朱雀大路（今の山陰線）の東が左京で、西が右京となり、南の端には羅城門（九条通）があり朱雀大路巾八・五米で両側に柳、桜をまげて北へ上がつて二条



京都市に都がうつされるまでの賀茂川と高野川の流れ

で突き当るとそこに朱雀門があつ

吉祥院は紀伊郡の西北端に位置

地三河守の領地であつて、居城の

で突き当るとそこに朱雀門があつて、それが大内裏つまり御所である。

平安京全体の広さは南北五千三百米、東西四千六百米で大内裏の広さは南北千八百米、東西千四百五十米の堂々たる帝の都が造成されたのである。しかしながら平安京の左京の殆んど真中を南北に賀茂川が流れているのはまことに不自由なので上賀茂のあたりで川の流れを東へ切換へる大土木工事が行なわれたようである。上賀茂から東へ流れを変えた賀茂川は今の出町柳で高野川と合流して現在の所を流れる鴨川となったのである。

ついでながら葵祭で有名な上賀茂を流れている間は賀茂川であり、下鴨を過ぎると鴨川となるのである。

この工事は桓武天皇平安京で造成の都市計画の一環として行なわれたものである。そして千年余今の京都の基礎がこの時出来たのである。(格致百年史)

豊臣秀吉全国の地租を 検地 山城の紀伊郡

天正十七年、豊臣秀吉全国の田租地を検するに及び米穀を以つてこれを算し、石高と称した。天正年間「山城」の石高は、廿二万九千五百石余にしてこれを八郡に分ち石高左の通りである。

守治 二万四千七百三十石余
久世 二万二千三百九十石余
綴喜 二万八千六百六十石余
相楽 三万七千五百九十石余
乙訓 二万五千八百五十石余
愛宕 二万六千四百九十石余
葛野 三万九千四十石余
紀伊 二万四千七百三十石余
紀伊郡は、伏見、柳原の二カ町、堀内、向島、深草、東九条、吉祥院、上鳥羽、下鳥羽、竹田、横大路、納所の十カ村を管轄し、戸数一万三千二百七十八、人口七万八百九十八人を有した。

京都府紀伊郡吉祥院村

吉祥院は紀伊郡の西北端に位置し、東は葛野郡七条村並に紀伊郡上鳥羽村に接し、西は桂川を隔て、葛野郡川岡村、乙訓郡久世村に對し、南は上鳥羽村字塔の森、北は葛野郡京極村に接して東西四丁南北三十三丁、戸数四百三十、人口二千四百六十四、村役場小学校は小字船戸にあった。

東海道線路は吉祥院の東より西に貫通し、西国街道は東より西に通過し本村を二分している。桂川は西部を南流して村界を画し、天神川は東部を流れて灌漑に便がある。田二百六十三丁、畑十六丁八反、村民の生業は農を主とし、稲作蔬菜栽培をなすものであるが、本村に於ける耕地面積の広きことは郡内第一にして土地肥沃なりといえども再々桂川の洪水の為水害を被る事甚だしかった。

徳川氏執政中は京都東、西町奉行の支配に属したが、明治四年廢藩置県と共に京都府の管轄となり紀伊郡第四区となる。

西中村は、明治七年五月西の庄村と中川原村が合併して西中村と称するに至った。文禄の頃には福

地三河守の領地であつて、居城の地であつたという。現に中の門、西の門、馬場等の名称を遺す。

石嶋村は、明治七年五月、石原、嶋の両村合併して石嶋村と改称した。

新田村、正徳元年一月、京都所司代板倉防州守の命を受けて、吉祥院の住人九兵衛外五名等が、協力して、桂川の流域の一部を開拓し、耕地十数丁を得て吉祥院村字向川原と称した。これ新田村のはじまりであつて、享保六年に制札下附せられ新田村として独立するに至った。俗に世間ではこれを鳥羽新田に對して吉祥院新田と呼んだ。石高百八石、かくして百数十年間独立していたが、明治七年に吉祥院村に合併した。

明治十三年西中、石嶋、上鳥羽、塔の森と五村連合役場を設けたがその後再々改廢され、十七年七月西中、石嶋と三村連合役場となり、廿二年町村制發布せられその施行により三村合併して、吉祥院村と改称し、村役場を吉祥院村字船戸に置き村長を選して、昭和六年三月まで村長為政の下に四十

二年間を経過したのである。三月廿一日その村制を廃し、四月一日より京都市に編入せられたのである。

京都市編入の動機

本村は京都市の西南の地に位し地勢平坦にして市と背中合せに近接し、運輸の便に富み最も恰好の工業地域である。先に奥村電機商会、(今の日本電池附近) 桂川染工株式会社(今の日本繊維の場所)等の工場の設立ありて以来、漸時工場に移転し来たるもの多く、殊に区画整理完成、市営電車敷設(九条通、西大路通の事)の眺きは工業地又は商業地、住宅地として急激なる発展を遂ぐべくは予想するに難からざる所である。

茲にすみやかに京都市と合併して今より道路その他の計画を樹立し、以て将来に備へ、社会的施設等、都市的設備の完成を期するは時勢に順応する所以であつて市、村民の福利を増進するに至るものである。一面、貧弱なる弾力性なき村財政を以てしては学

校、道路、下水、其の他交通、衛生消防等の施設経営等の充実完備は到底不可能であると思われる。故に本村は茲に於いて、かねてより京都市に合併の希望を有し、合併の利害得失等につき、各地の視察調査を怠らず、村当局に於いて合併を利とするに意見の一致を見るに至りかつてこれが促進を知事、市長に陳情したほどであつたが、愈々時期到来し昭和六年四月一日、即ち本府三部経済制度の撤廃せられたると同時に、一市三町二十三カ村と共に京都市に編入さるゝに至つたのである。現在に於て戸数千二百、人口五千六百を超ゆるに至れり。(吉祥院村公報)

菅家譜代の領地

吉祥院は、さきに地名起源の項で述べた如く、菅原清公卿が領有せられてから菅原家譜代の領地として総て菅家の配下にあつた事は疑う余地もなく、菅公筑柴に左遷の後、吉祥院(前述)及び天満宮の社領となりしが、同宮司は菅家の後裔世襲奉仕しつゝある。

信長の没収、秀吉分配

(維新前領主、七十二)

永祿の頃から織田信長の勢力とみに加わつて、今川義元を桶狭間に討つて以来、度々の合戦で連戦連勝して元亀元年には京都に入り皇居を造営し、その威海内に振つた。然るに比叡山の僧徒徒はず、同二年九月信長は叡山を討つた。此の時比叡山三千坊と称せられ皇城鎮護を誇つた多数の寺院は焼き払われた。この時吉祥院は、伝教大師(最澄さま)を開基第一世と仰ぐ関係もあり、且天台宗に属して、叡山とは不離の関係がある所から当時の宮司某は織田信長の命にそむき比叡山延暦寺の僧徒に組したるの故を以て、信長の激憤を買ひ、遂に其の社領を没収せられしと伝えられる。後慶長年間秀吉これを五十九家に分配し、(注)参照 西中、石嶋を合して領主たるもの七十二あり。そして維新前まで三百年相続したもので、維新當時には吉祥院の総石高は三千二百九十五石四斗一升八合であつたという。

吉祥院隣保館創立

(注)豊臣秀吉がお土居をきざき洛中洛外の区画整理事業をやつた時お寺ばかり集めて寺町をつくつた時、その用地の地主に見返りとして吉祥院の社領が分配されたといわれる。

吉祥院に於いて社会事業施設として隣保館(保育園)の必要なるは、かねて熱望致し居り候折柄昨年の風水害記念として、府市当局の多大なる御尽力と御指導を賜り且つ吉祥院各位の御同情を得て隣保館の計画をたて、天満宮境内地に隣接し市の児童公園にも接続せる地点に建設工事のところ、昭和十年十月茲に竣工の式を挙行するに至つた事は誠に御同慶の至りなり。

本隣保館開始の上は保育園として或は方面事務(今の民生関係)並に吉祥院社会事業の源泉地たる事を希う。と

保育園の目的

保育園は幼児を(四才以上学令未滿)受託し主として自然保育に

依り心身の健全なる発達をはか

昭和三十七年十二月十一日

らとられたものである。

依り心身の健全なる発達をはかり、かつ家庭の労働能率を増進せしむるを以て目的とす。
(当時の資料から)

交通の発展

昭和初期の交通の便と言えば、旧西国街道の久世橋より七条大宮間を乗合自動車、唯一の交通機関として利用されていた。

その後、昭和十二年に市電が、西大路九条まで敷設され、十三年に国鉄西大路駅が営業を開始したことにより、交通の便は一段と良くなり、地元の発展に大きく寄与した。

国鉄西大路駅の沿革

昭和九年五月

地元において、駅設置運動始まる。

昭和十二年

地元より土地一、〇五七坪及び建設費十一万円を出資着工す。

昭和十三年九月十三日

営業開始

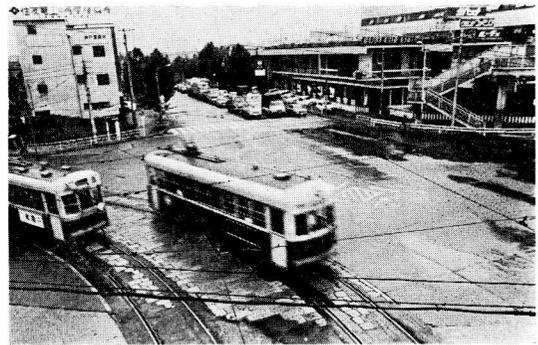
昭和三十七年十二月十一日
新幹線工事に伴ない新駅舎落成。

停車電車	職員数		開業時	現在
	日乗車人員	1降車人員		
一四五本	六五八名	六三一名	一三名	現在
	九、〇七一名	九、〇〇〇名	二二名	

学区周辺における市交通関係

— 運転開始年月日 —

区	間	年月日			
		年	月	日	
電車	七条大宮—九条大宮	昭	10	8	21
	九条大宮—西大路九条	昭	12	5	7
	西大路七条—西大路八条	昭	13	12	22
	西大路八条—西大路駅	昭	14	7	5
	西大路駅—西大路九条	昭	13	9	16
バス	千本十条—吉祥院天満宮	昭	27	2	18



西大路九条

町名のおこり

(西ノ茶屋町)

今でこそ西国街道は裏通りとなり、国道一七一号線に幹線道路としての使命をゆだねているが、ひと昔前までは、京都と西国を結ぶメイン・ルートとしての役割りを果たした大切な道路であった。

西国から上って来た旅人が、京都の街を目前に、「三軒茶屋でひと休みして京に入ろう」と街道の休憩所扱いにされたのが、現在の西ノ茶屋町であった。

勿論、町名の由来もその茶屋か

らとられたものである。

茶屋と言っても、祇園など花街の茶屋ではなく、手甲脚はんにわらじばきの旅人が、わらじの紐を締めなおし、弁当を開いて都に入る前の腹ごしらえをする茶店のことである。

茶店は、街道の西側に三軒あり、人々はこれを、「西ノ茶屋」「上ノ茶屋」「下ノ茶屋」と名づけて明治以前は街道を往来する旅人の湯茶の接待で大いに繁昌をしたと言ふことである。

その後、西高瀬川に舟運が開かれたことにより、旅人の流れが変わり、往年の面影は消え去ったが、吉祥院の西に位置する処から、人々は此の地を西ノ茶屋と呼ぶようになったとのことである。



西之茶屋のお地藏さん

吉祥院の現勢(現在では下図の数字のうちA B C Dを除くはかは大中に変動)

吉祥院

業種	総数		経営組織別					規模					別														
	事業所数	従業者数	個人	会社	社外法人 の法人	法人でない 団体	公営	1~4人	5~9人	10~29人	30~49人	50~99人	100~299人	300人以上	事業所数	従業者数	事業所数										
A 農業	100	300	100	300	—	—	—	100	300	—	—	—	—	—	—	—	—	A									
B 林業, 狩猟業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	B									
C 漁業, 水産養殖業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	C									
D 鉱業	1	X	—	1	—	—	—	—	—	1	X	—	—	—	—	—	—	D									
E 建設業	50	744	27	90	22	628	1	26	26	59	8	55	11	199	2	130	1	E									
F 製造業	349	13,907	141	768	207	13,139	1	100	255	78	535	101	1,748	24	882	21	1,494	17	F								
G 卸売業, 小売業	357	3,883	253	721	99	3,137	5	247	541	47	305	46	706	6	218	3	225	6	G								
H 金融, 保険業	7	112	3	21	1	X	3	3	7	—	—	3	105	1	X	—	—	—	—	H							
I 不動産業	37	63	33	49	4	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	I							
J 運輸通信業	46	1,487	9	41	36	1,446	1	10	21	8	58	14	220	3	115	7	534	4	546	J							
K 電気, ガス, 水道業	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	K						
L サーマーズ業	148	1,317	96	383	29	571	17	215	4	12	2	136	96	224	26	176	14	184	4	163	8	570	—	—	—	—	L

京都市統計センター, 昭和45年4月発行, 京都市の事業所から抜すい。(昭和44年事業所統計調査結果報告による)